あるとこに若い衆がね、オナラするってば、つまり屁が非常に臭くて、友達だのみんなに「おめの屁だばくへぇなぁ」って。「なしてそんなにくしぇーじやぁ」って。「しばーらく、くしぇでぇ」って。そういうふうにみぃんな友達に言われるもんだから、「へば、オレの屁ってなんぼくしぇもんだべかなぁ」って、ある日自分のお尻のところに手をやって、「ブゥーッ」ってして、そして手でこうして嗅いでみたら、「なるーほど、オレの屁だばくしぇなぁ。ほんーとにくしぇでぇ」って。そしてちょうど、桜の花が散って若葉の出るころに、そよそよそよってなま暖かい風が吹いてくるそういう時節に、こういくとまぁーんだ臭いんだそうです。「ほんとに友達のいうとおり、オレの屁だばくしぇなぁ」って。そいで、あぐにして煙草買いに入ったら、「こんにちは、煙草けねげぇ」「はぁい」ってそこのおかみさん出てきて、煙草こうやったら(手渡そうとしたら)、「あいぃー、あんちゃん、オメ鼻さなんだげぇ、ついてらじぃ。おがしものついてらねぇ」。「なんだげぇ」って、こうやって見たら、ウンコが鼻についてたはんで、それだからその臭み、屁の臭いでなくて、ウンコの臭いだったって、そういう笑い話。

袴田タニ(長崎　79歳)

〈解説〉

屁とか糞という下品なものを笑い話の題材とすることは古い。ここでは屁の臭いと思っていたら、実は糞であったという、頓馬な話である。桜の花が散って若葉の出るころという美しい情景を設定していて、臭いを消しているところが一工夫されている話である。